

Lorraine M. Gesick. *In the Land of Lady White Blood: Southern Thailand and the Meaning of History*. Ithaca: Southeast Asia Program Cornell University, 1995, 98 p.

1. Introduction
2. Phatthalung and the Problem of History
3. Royal Texts and Local Meanings
4. The Historiography of Southern Thailand
5. Landscape and History
6. National History and Local History

この本は、著者 Gesick がタイの国立文書館で入手した、ある歴史資料——南部タイのパタルン地方につたわる「白き血の姫 (Lady White Blood) の物語」——が、いかにしてパタルンの地から持ち出され、新たな歴史的価値を与えられながら「タイ国史」の一部となっていったか、そして、もともとその物語は南タイではいかような価値を与えられていたか、ということを読み明かす、いわば「物語の成立物語」とでもいうべきものである。その意図としては、Gesick 自身が冒頭で述べているように、これらの資料とそれをはぐくんできた社会の研究を通して、17世紀から現在までの南タイ地方の人々の歴史感覚を明らかにしようとする試みである。

ここでは物語の筋はさほど重要ではない。なぜなら、この資料は中央からやってきた王族によって20世紀初頭に「収集」されたとき、パタルンでは内容を読まれることなくむしろ信仰の対象としてある寺に奉られていたのだし、またこの研究はこのテキストを「唯一の歴史記述」としてその価値を検証することを目的としているわけではない。Gesick がいうように前近代のパタルンにおいては「history」は「histories」であり、multi-vocal (多義的、あいまい) なものであったからだ。この物語には超自然的でシンボリックな要素がみられるが、現存する写本は17世紀に成立したらしいとしても、その内容にはさまざまな口承伝統の要素が混入し、その歴史記述にはときどきの時代感覚・歴史感覚が反映されており、相対的に閲覧できる文字資料の少ないタイの前近代史においては、そもそも比較検討による資料批判は困難であり、しばしば無

意味である。

歴史研究における「文字資料」と「非文字(声)の資料」の扱いをどうするかという課題はすでに永く宿題となっているが、我々はなかなかよい解答を見いだせないでいる。歴史というものは極めてさまざまな文化概念・現象を時間と空間にちりばめながら抱え込んでいるものであり、ことに口承伝統を「記述」する作業においては、記述者自身の「歴史感覚」が影響せざるを得ない。南部タイ、パタルンの世界にとっての「異邦人」である著者の Gesick 自身が苦しみつつ示唆するのは、これらの「歴史感覚」というものは、その「土地の風景」によって生まれ、その multi-vocal な「歴史記述」の中に隠されているのではないかということであった。

しかしながら、この本が描き出そうとしている「土地に根づいた歴史感覚」(「伝統的歴史感覚」といってもいいだろうか) は、一般化するにはいまなお説明が困難であり、しかもおそらく、より近代西欧教育を受けた者ほど困難ではないかと予想されるのである。この方法論の応用にあたっては我々はまた新たな「宿題」を抱え込んだことになる。しかしながら、すでに近代西欧教育による「科学的歴史感覚」となじみの深いアジア人としての我々にとっては、この「伝統的歴史感覚」が「近代的歴史感覚」にかわっていく瞬間を理解することはむしろ容易であろうと思われる。

Gesick はこの本の最後で「白き血の姫」テキストの物語は終わったわけではないという。彼女は、パタルンの故地からとりあげられ、国立文書館で埃をかぶっているこの資料の複製を作り、それがかつてあった本来のパタルンの寺に「戻した」。このテキストを信仰しそれを支えたパタルンの口承伝統は完全に絶えたわけではなく、そこからまたなにかがはじまることを彼女は期待する。そのテキストを風景の中に戻すことで、彼女は自分自身がこのテキストに係わる物語(風景)の一部となることを望み、だからこそ「物語はまだ続く」のである。

(黒田景子・鹿児島大学)